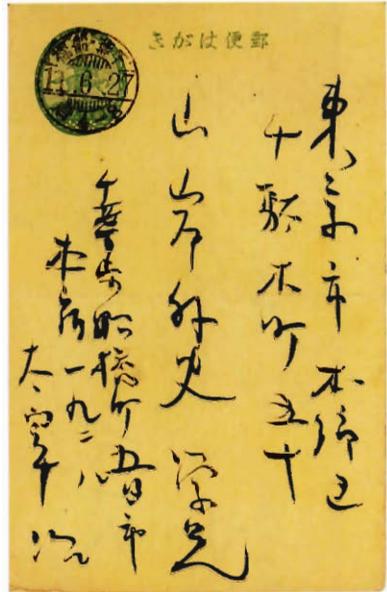


昭和11年(1936年) 6月27日 [消印]

愛情を別件とし、他日おれに送ると。
 帝大新南へ大きく
 晩年しのぶをせしめます
 二枚のスイセンのおこぼ
 者、大正三年送達にて
 下谷に上野櫻木町二十七の
 砂子屋敷にありて、このみ
 まう、大正三年ののち、おれはよごみ
 なく自然に使用下さい、兄のマンリイなる



帝大新聞へ大きく「晩年」の広告出します、

二枚のスイセンのお言葉、大至急速達にて、下谷区上野桜木町二十七の砂子屋書房あてに、たのみます、「天才」くらゐの言葉、よどみなく自然に使用下さい、兄のマンリイなる愛情を期待する、他日お札に参上。

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史学兄
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

【校異】

広告出します。(全集) → 広告出します、

(改行なし) 二枚のスイセンの(全集) → (改行)

たのみます。(全集) → たのみます、

使用下さい。(全集) → 使用下さい、

期待する。(全集) → 期待する、

【フート】

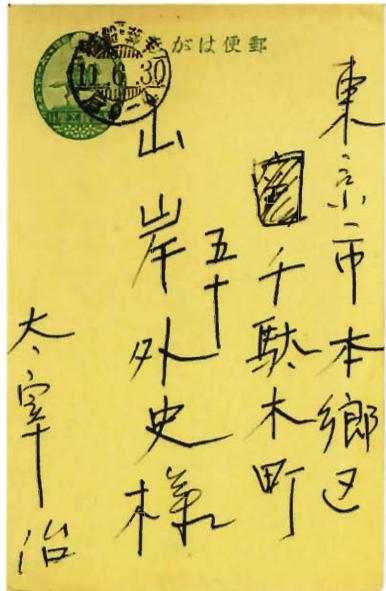
スイセンのお言葉——山岸外史の推薦文は、「帝国大学新聞」(七月六日)の「晩年」広告には使われず、中村地平推薦文(無題)が使われた。山岸の「太宰治の短篇集『晩年』を推薦する」は、砂子屋書房発行の「文筆」創刊号(昭和十一年八月)に中村地平の

文章(「晩年」の讀)とともに掲載された。

「天才」くらゐの言葉——山岸外史「人間太宰治」には、「天才! この言葉に困った」とある。山岸は「天才」ということばを避け「鬼才」としたが、太宰は「鬼才」では満足できなかったのである」と書いている。

昭和11年（1936年）6月30日（消印）

取リアエズ 申シノベマス
 オ礼ニムツク上
 近日
 イタシマス。 糸女 細
 ソノ折 談笑。 2-1。



取リアエズ肅然タルオ札、申シノベマス。
 近日オ札ニ参上イタシマス。委細ソノ折、談笑。

不一。

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様
 太宰治

【校異】

取リアヘズ〔全集〕 → 取リアエズ

(改行なし) 近日〔全集〕 → (改行)

(脱字)「談笑。」の次行〔全集〕 → 不一。

昭和11年(1936年) 7月5日 [推定、消印]

東京市
本郷区

中野区河五十

山本外史

三子兄



大平十治

生目 專一

いんげん

原稿 雑

誌の本文に

掲載させて

いたがさね

小室 三子

として 立派に

通るものと

信 近日 法向



【校異】
昭和十年頃（全集）→昭和十一年（1936年）
7月5日（ノート）参照

先日書いていただいた原稿、雑誌の本文に掲載させていただきたく、堂々評論として立派に通るものと確信。近日訪問。

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史学兄
太宰治

原稿」を、左に記す「太宰治の短篇集『晩年』を推薦する」と推測しているが、後者はそれを採らなかつたためか。しかし、後者の書簡の掲載は昭和十一年の場所にあるから、「昭和十年頃」は誤植か。ここでは前者を採用する。消印では、末尾の日にちの「5」が確認できるのだが、スタンプ内の「5」の位置から一桁の数字と思われる。

先日書いていただいた原稿——一九九一年三月刊行の『太宰治全集』第十一巻の注記にあるように、「太宰治の短篇集『晩年』を推薦する」（『文筆』創刊号、昭和十一年八月）と思われる。

【ノート】
この書簡の発信年月日は、直筆がなく消印からも判明しない。一九九一年三月刊行の『太宰治全集』第十一巻では「昭和十一年七月上旬頃」とし、一九九九年四月刊行の『太宰治全集』第十二巻では「昭和十年頃」としている。前者は、「先日書いていただいた

昭和12年（1937年）1月20日（消印）

梅サ化ハ 輪 ありかとう。

お逢ひにたく 思つておます。

空飛ぶ鳥を見しよ

播かす
刈らす

（マタイ七章）

このごろ 毎日、山登っておます。

傷心、

川沿いの 路を のぼれば

赤き橋

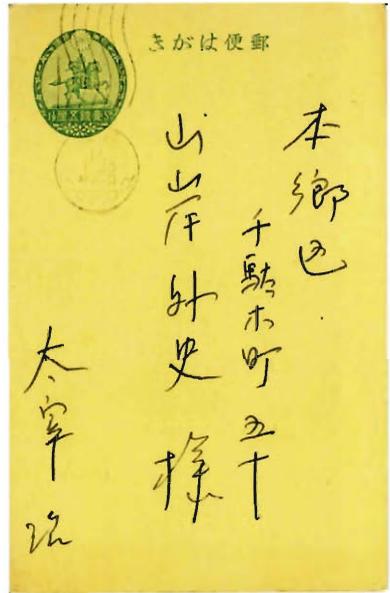
また

行き 行けば

人のうゑが 赤

これは汚きパレット一枚、おゆるし下さい。

「死ぬるが忠義」



梅花一輪ありがとう。

お逢ひしたく思つてゐます。

このごろ毎日、寝てゐます。

傷心、

川沿ひなみだの路をのほれば

赤き橋

また行き行けば

人の家かな

空飛ぶ鳥を見よ

播かず

刈らず

倉に収めず

(マタイ七章)

【校異】

ありがとう。「全集」→ありがとう。／傷心。「全集」→傷心、

／人の家かな。「全集」→人の家かな／「死ぬるが忠義」。「全集」

→「死ぬるが忠義」、／(縦線なし)。「全集」→(縦線あり)

【フット】

傷心、……—昭和十一年十一月二十九日付小館善四郎宛はがき、

十二月三日付鱒崎潤宛はがきにも同じ文句がある。山岸外史は

『人間太宰治』で、小館善四郎宛はがきを引用し、妻初代と小館善

四郎との性関係を知った太宰の「心境の深い苦しさもよくでてい

る」と書いているが、それは誤りである。このときの太宰はまだ

二人の関係を知らなかった。後にその事実を知った太宰は、初代

「死ぬるが忠義」、

これは汚きパレット一枚、おゆるし下さい。

本郷区千駄木町五十 山岸外史様

太宰治

と心中未遂を起こし、離別する。小館善四郎は、太宰の四姉きやうの夫の弟で帝国美術学校の画学生。

昭和13年(1938年)12月17日(消印、推定)

ちかきうち 第一信 ねえ送ってします。
お女心して あらつしやい。
汝 信仰うすきものよ。

(死んではいかん。死んではこまる。)

お手紙 すねふん ありがたかった。みなわかる。
くるしきも、ゆゆかカカも 腕力も 太陽も。
ほくち、云々、同感。私は働かなければいけない。
た、當年も、このごろは、多少、山崎さんなつて居り
ます。少しづつ重量感できまーた。むかしのはニ
ヤケタ、ウソキの大、當年もなつかしいが、あれでは
生きてゆけません。
四五日お待ち下さい。 賢(頭)は、天才鬼談さんせい。



ちかきうち第一信發送いたしました。

安心してゐらつしやい。

汝、信仰うすきものよ。

(死んでは、いかん。死んでは、こまる。)

お手紙ずるぶんありがたかつた。みな、わかる。くるしさ

も、御努力も、胆力も。太陽も。

ばくち、云々、同感。私は、働かなければいけない。

太宰も、このごろは、多少、吃つとなつて居ります。少し

づつ重量感できました。むかしのニヤケタウソツキの太宰

もなつかしいが、あれでは、生きてゆけません。

四、五日、お待ち下さい。題は、「天才鬼談。」さんせい。

【校異】

十月十七日〔全集〕 → 12月17日〔ノート〕参照

安心していらつしやい。〔全集〕 → 安心してゐらつしやい。

胆力も、〔全集〕 → 胆力も。

吃つと〔全集〕 → 吃つと

ニヤケタ、〔全集〕 → ニヤケタ

【ノート】

消印の月の部分は「10」とも「12」とも見える。発信地の住所が甲府の下宿屋寿館であることから、十二月と推定される。天下茶屋から寿館に移ったのは、昭和十三年十一月十六日のことで(同日付け中畑慶吉宛書簡による)、石原美知子の母がこを「探して

東京市本郷区坂下町十二 椿庄 山岸外史様

甲府市西堅町九三 寿館 太宰治

交渉してくれた」(津島美知子『回想の太宰治』)ことを考えれば、

下宿する以前の十月に短期間滞在したとは考えにくいからである。

甲府市西堅町——井伏鱒二に勧められ御坂峠天下茶屋に住まいを

移していたが、この頃、石原家(見合いをした石原美知子の家)

に近い下宿に入る。

昭和13年(1938年) 12月30日 (消印)

拝見

けふ お手紙 添付、この口を知り、わづかに
と思ひつゝ。 ながんし、ふけては、おちあつたの
けれど、私も、思ひつかひ、しておれところ、あつた
やうには思はれます。 あれは、とにかく、破つて下
さい。

お引き返して、こんな結果にふり、強念に思ひ
ますか、よしのを、残したいのは、私も、おほらぬ、保持
ですから、来春、やつくり、苦立ちついで、ちやんと心の
すわつたところ、まれ、書いてみます。 今のとき、まん
遠慮なく、指針下さい。 取不致、おわります。



【校異】
不取敢、〔全集〕 → 取不敢、

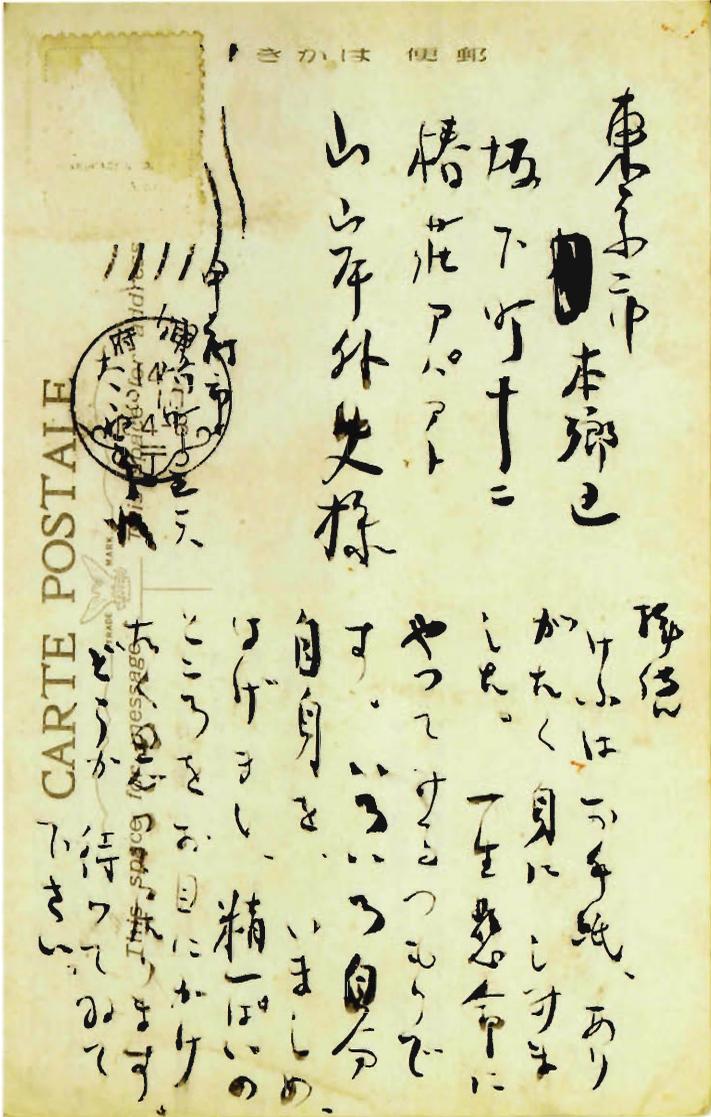
拝啓

けふお手紙読み、君の閉口を知り、わるかつたと思ひました。みぢんもふざけてはゐなかつたのだけれども、私も、思ひちがひしてゐたところあつたやうに思はれます。あれは、とにかく、破つて下さい。

お引き受けして、こんな結果になり、残念に思ひますが、よいものを残したいのは、私もかはらぬ気持ですから、来春、ゆつくり落ちついて、ちゃんと心のすわつたところで、また、書いてみます。そのとき、また、遠慮なく、指針下さい。取不敢、おわびまで。

東京市本郷区坂下町十二 椿莊 山岸外史様
甲府市西堅町九三 寿館 太宰治

昭和14年(1939年) 3月10日 [消印]





拜啓

けふはお手紙、ありがたく身にしみました。一生懸命にや
つてみるつもりです。いろいろ自分自身を、いましめ、はげ
まし、精一ぱいのところをお目にかけてたく思つて居ります。
どうか待つてゐて下さい。

東京市本郷区坂下町十二 椿莊アパート 山岸外史
様

甲府市御崎町五六 太宰治

【校異】

(改行なし) どうか待つてゐて (全集) → (改行)

【フット】

甲府市御崎町——石原美知子との結婚のため、昭和十四年一月六
日に借家に転居した。



【校異】

謹啓〔全集〕→謹啓。／その時は、〔全集〕→そのときはいろいろ〔全集〕→いろいろと／ノロクサなつて〔全集〕→ノロクサクなつて／やつと〔全集〕→やつと、／まだ、まだ、〔全集〕→まだまだ、／（改行なし）貴兄のやさしい〔全集〕→（改行）／お言葉の真意〔全集〕→お言葉の真意／このごろ〔全集〕→このごろ、／恥かしくて、〔全集〕→恥づかしく

て、／御海容下さい。〔全集〕→御海容下さいまし。

【フォート】

「文筆」の六月号に——六月号ではなく七月十日発行の初夏随筆号に、「人間キリスト記」その他」を発表。山岸外史著『人間キリスト記』第一書房、昭和十三年十一月）と山崎剛平著『水郷記』（砂子屋書房、昭和十三年十月）についての随筆。

謹啓。

私こそ、ごぶさた申して居りました。おゆるし下さい。僕も、今月末か、来月末には、甲府を引き上げ、も少し、東京へ近いほうへ、移住しようと思つて居ります。そのときはまた二人で野道を散歩しながら、いろいろと貴兄の御意見承りたいと望んで居ります。

誰も、話合ふ人が無いので、このごろの私は、少しノロクサクなつてゐるかも知れません。しかし、もう、あまりみつともなくきよろしくないつもりです。謙譲といふこと、ほんとうの謙譲といふこと、少しわかつてまゐりました。やつと、わかりました。自分のちからの限度を知りました。私は、まだまだ、だめです。毎日、努めて、何かと仕事つづけて居りますが、いづれも甘つたれた習作のみで、いまは、もう十年、ながいきしたいと、つくづく思つて居ります。

貴兄のやさしいお言葉の真意このごろ、よくわかつて来ました。いままでの自身の傲慢が、恥づかしくて、たまりません。「文筆」の六月号に貴兄のお仕事のこと、ほんの少し書きましたが、御海容下さいまし。

東京市本郷区坂下町十二 椿荘アパルト 山岸外史
学兄

甲府市御崎町五六 太宰治

昭和14年(1939年) 8月10日 [消印]

御紙、

は、轉居 取行 させられて、今年秋は、大いに

お仕事 すすむことと 好じられます。私も、

ことしの秋は、ふんばらなければなりません。

三鷹島の家が、豫定どほり 完成せず、

たいてい 十日ごろと 家主から言ってきた

が、今 明日 あたり、^{確實}の知らせ 来るん

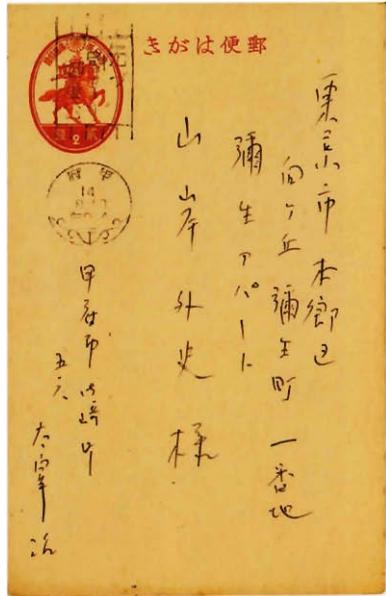
らうと思つておます。豫想とちがひなので、

いつして 仕事も 出まされ、毎日 毎日 本ばかり 讀ん

でおます。 移轉 せう、すい 知らせ せいで、

ます。 いづれ 東京 まで 行く。

おつた。



拝啓、

御転居敢行なされて、今年の秋は、大いにお仕事すすむことと存じます。私も、ことしの秋は、ふんばらなければなりません。三鷹の家が、予定どほり完成せず、たいてい十日ごろと家主から言つて来ましたが、今日あたり、確実の知らせ来るだらうと思つてゐます。予想とちがつたので、イライラして仕事も出来ず、毎日毎日、本ばかり読んでゐます。移転したら、すぐ、お知らせいたします。いづれ、東京で万々。

匆々。

東京市本郷区向ヶ丘弥生町一番地 弥生アパート
山岸外史様
甲府市御崎町五六 太宰治

【校異】

拝啓〔全集〕 → 拝啓、

がんばらなければ〔全集〕 → ふんばらなければ

イライラ仕事も〔全集〕 → イライラして仕事も

すぐ〔全集〕 → すぐ、

(改行) いづれ、〔全集〕 → (改行なし)

草々。〔全集〕 → 勿々。

【ノート】

三鷹の家——東京府北多摩郡三鷹村下連雀一二三番地の新築の借家。九月一日に引越す。

昭和15年(1940年) 2月28日(消印)

柳修。

二つさむいゝに生ります。金部はやつて
 戻ります。二つさむいゝか。おは。長尾
 のあの会に来。金部をひいて。未だに抜け
 ません。高橋君のとこへ遊びに行き
 ませんか。三月五日は、け部会心で
 せう。五日の正午に、新内宿御舞止所の
 東原。パンの二階で。お待ち。てこて
 にくやう。け部会をわすけたば。そちらから
 日野場所まで。指定不さい。
 いづれ。あふ達の折は。いゝ。
 ちやうど。



拝啓。

ごぶさたして居ります。風邪がはやつて居ります。ご丈夫ですか？ 私は長尾のあの会以来風邪をひいて未だに抜けません。高橋君のところへ遊びに行きませんか。三月五日は、御都合どうでせう。五日の正午に新宿駅前の東京パンの二階でお待ちいたして居ります。御都合合はるければ、そちらから、日時場所など御指定下さい。

いづれ、お逢の折は、山々。

草々。

本郷区向ヶ丘弥生町一番地 弥生アパート 山岸外史様
府下三鷹村下連雀一一三 太宰治

【校異】

拝啓〔全集〕 → 拝啓。

(改行なし) 草々。〔全集〕 → (改行)

【フット】

長尾のあの会——長尾良の入営送別会。二月十八日に鶯谷の「笹の雪」で行われた。中谷孝雄、山岸外史、高橋幸雄、塩月越らと出席。

高橋君——高橋幸雄か。